

栃木県埋蔵文化財センターだより

やまかいどう

No.
30
2002. 4

特集 平成13年度栃木県発掘速報



かみこうぬし もばら

——上神主・茂原遺跡

解明すすむ古代の役所跡——

上三川町上神主と宇都宮市茂原町にまたがるこの遺跡は、人名を刻んだ屋根瓦が大量に発見されることから、古代(奈良時代ころ)の寺院跡ではないかと言われてきました。

町と市では、この遺跡の実態を解明するために、平成9年度から合同で発掘調査を行っています。調査がすすむにつれて、寺院跡の可能性は徐々に薄れ、役所跡である可能性が高まってきました。特に昨年度の調査では、遺跡の南部の方で、多数の高床式倉庫跡が発見されました。これらは規模や構造などから当時租税として集められた米(稲や粳)を保管する倉庫であるとみられることから、ここが古代の郡役所(郡衙)に係わる施設であると考えられる

ようになりました。

そして今年度、この遺跡が古代の役所跡であることを決定付ける建物跡群が発見されました。上の写真がその状況を撮影したものです。確認された柱穴の配列状況から、正殿と呼ばれる大規模な建物を中心にして、その東西に脇殿と呼ばれる細長い建物を配置した様子がわかります。このような建物配置は、古代役所の中心施設に典型的にみられる政庁と呼ばれるものであり、政務をとったり、儀式を行ったりした場と考えられています。

以上のことから、この遺跡は中央に政庁を置き、南部に倉庫群を配した大規模なものであることが明らかとなり、古代下野国河内郡衙跡である可能性が極めて高くなりました。

(宇都宮市教育委員会 梁木 誠)

平成13年度県内発掘調査の動向

県・市町村ともに大規模な面的調査は少なくなっている。県埋文センターにおいては北関東自動車道路が新4号国道の東地区に事業が開始され、上三川町、真岡市、二宮町に発掘や確認調査が実施されている。芳賀バイパスに係わる発掘が今年から加わった。

北関東自動車道路の優先区間(東北道—新4号国道)、佐野新都市開発に係わる調査は昨年度で報告書まで完了した。

トップニュースとして新聞紙上を賑わした発掘が目についた。10月4日の野沢遺跡(宇都宮市・県センター) 11月30日の桃花原古墳(壬生町・町教委)、14年1月16日になって上神主・茂原遺跡(宇都宮市・上三川町・市町教委)などである。野沢遺跡は縄文時代草創期の住居址2軒が確認され、土器の観察や炭化物の分析結果から約1万2000年くらい前の遺産と判断された。本県では最も古い構築物として位置づけられた。

桃花原古墳は羽生田地域に所在する大型古墳群の最終期の円墳で大規模な周堤帯を持ち、その規模は約90mである。石室に接続する大規模な石積による前庭部が確認され、この地域古墳時代の権力構造の解明に一石を投じる調査になった。全体の調査は継続されるよう来年度以降の調査の進展に期待が膨らむ。

上神主・茂原遺跡では昨年度上三川町地域で確認した東西・南北方向にL字形に配される3間×3間の掘立柱建物群の北方(遺跡の中央部・宇都宮市域)に長大な掘立柱建物が「コ」の字形に配される河内郡衙政庁(郡庁院)が確認され調査の進展に大きな前進が見えた。

南向きの政庁は桁行5間(17m)、梁間2間(6.2m)に南に庇(出は2.4m)で、西脇殿ともに建替えが見られる。東西脇殿はほぼ同じ規模で桁行10間(36.8m)、梁間2間(4.4m)の規模。本県で郡庁院が確認されたのはこの遺跡が初めてである。

史跡整備のための国分寺跡(国分寺町教委)の調査は3年目に入り、金堂の柱跡、回廊、中門の規模が明らかになっている。

保存を模索する確認調査は藤本観音山古墳(足利市・市教委)でも継続調査をしており、宇都宮市教委による瓦塚古墳の調査も史跡公園としての保存を目的としている。

県埋文センターでは重要遺跡確認調査として長者ヶ平(南那須町)に発掘を開始した。同遺跡は東山道筋に隣接し、かつて、付近の畑から焼米や礎石状の石群の出土が確認されており、付近の地名「うまやくぼ」との関連で東山道の新田駅家(にいたのうまや)跡の確認が期待される遺跡である。



こうした史跡保存・活用のための施策が各地で活発に行われていることは文化財保護の到達点として特筆されるべきことであろう。

あまり発掘が見られなかった二宮町、芳賀町地域で北関東道路、芳賀バイパスに係わる調査が実施された一方で、発掘が盛んであった小山市地域に13年度の発掘が少なかったことなどの要因は何なのだろうか。これらは県全体、あるいは全国的にも同じ傾向と思われるが開発が急減していることと無関係ではあるまい。

岩舟町和田窯跡の発掘がある(町教委)。窯本体の下方の灰原(捨て場)の調査であるが、瓦陶兼用の窯らしいが、窯の調査は久しぶりである。この窯の瓦製品は下野国府や国分寺に使われている。

少し変わるが、本年1月8日付「下野新聞」の論説に「文化財生かす街づくりを」と題して宇都宮市が百穴横穴墓(県指定)の景観保全の目的で指定地周辺(外)の開発が差し迫る土地の公有化をしたことを評価する記事が掲載された。論説に文化財が扱われることも希有なことで、宇都宮市の文化財保護への見識と文化遺産を積極的に生かす個性ある街づくりの施策が評価されたものと言えるであろう。(調査部長 大金 宣亮)

現地説明会資料

発掘調査の途中や終了時には現地で説明会を行うことがあります。調査担当者が直接案内するほか、資料の配付や出土品の展示も行います。9ページから28ページは、平成13年度に遺跡で開催した際の「現地説明会資料」です。

平成13年度 栃木県内発掘調査一覽

市町村教育委員会が行った発掘調査

No.	遺跡名	市町村名	主な時代
1	宇都宮城跡	宇都宮市	中世～近世
2	薬師堂遺跡	〃	中世
3	瓦塚古墳群	〃	古墳
4	本村古墳群	〃	古墳
5	岡田山遺跡	〃	古墳～奈良・平安
6	堀之内遺跡	〃	縄文
7	上神主・茂原遺跡	〃	奈良・平安
8	板戸愛宕塚古墳群	〃	古墳
9	権現山遺跡	〃	古墳
10	大門宿古墳	鹿沼市	古墳
11	竜地遺跡	〃	古墳～奈良・平安
12	鍛冶谷遺跡	〃	縄文、奈良・平安
13	亀山北遺跡	真岡市	古墳
14	下高間木A・B遺跡	〃	縄文
15	佐野城跡(第14次調査)	佐野市	中世～近世

No.	遺跡名	市町村名	主な時代
16	下林遺跡	佐野市	縄文
17	助戸山古墳群(第3号墳)	足利市	古墳
18	藤本観音山古墳	〃	古墳
19	和泉遺跡	〃	弥生～奈良・平安
20	上神主・茂原遺跡	上三川町	奈良・平安
21	坂上古墳群	〃	古墳
22	薬師寺付近遺跡	南河内町	奈良
23	與能境遺跡	芳賀町	奈良・平安
24	和田窯跡	岩舟町	奈良・平安
25	桃花原古墳	壬生町	古墳
26	タヤ久保I遺跡	喜連川町	縄文
27	田町古墳	〃	古墳
28	三輪仲町遺跡	小川町	縄文
29	上野原遺跡	湯津上村	平安

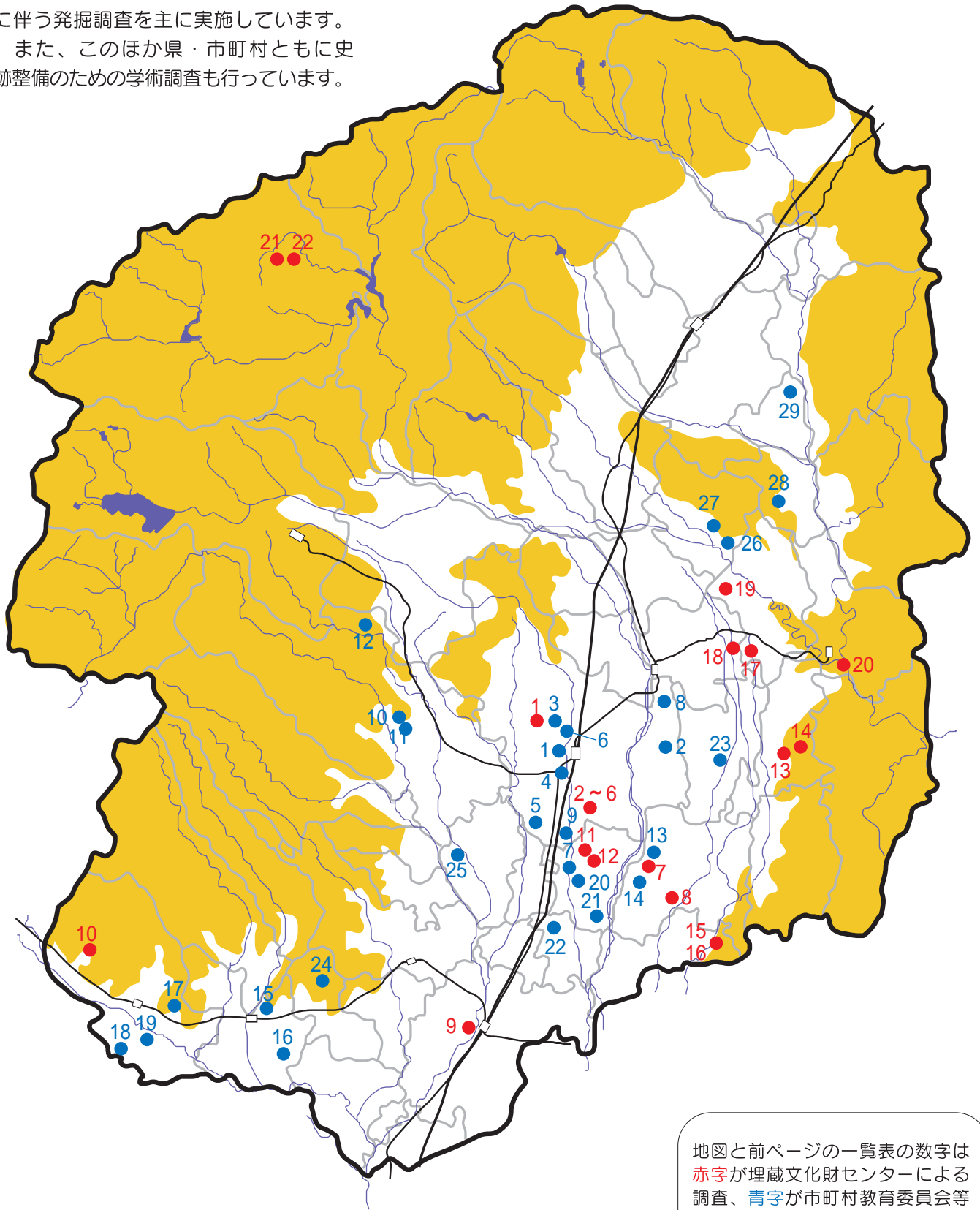
埋蔵文化財センターが行った発掘調査

No.	遺跡名	市町村名	主な時代
1	野沢遺跡	宇都宮市	縄文、中世
2	権現山・百目鬼遺跡	〃	古墳
3	西刑部西原遺跡5区	〃	古墳～平安
4	〃	6区	〃
5	〃	7区	〃
6	杉村遺跡17区	〃	縄文、古墳
7	長田浅間塚	真岡市	近世
8	下陰遺跡	〃	縄文、古墳・中世～近世
9	祇園城跡	小山市	中世～近世
10	板倉中妻居館跡	足利市	古代・中世
11	西赤堀遺跡	上三川町	古墳・古代

No.	遺跡名	市町村名	主な時代
12	高島遺跡	上三川町	調査中
13	高林遺跡	市貝町	古墳・古代
14	彦七新田遺跡	〃	古墳～平安
15	峰高前遺跡	二宮町	〃
16	西物井遺跡	〃	〃
17	大用地遺跡	高根沢町	縄文、中世
18	大野遺跡	南那須町	縄文
19	長者ヶ平遺跡	〃	古代
20	鳴井上遺跡	烏山町	縄文、古代
21	川戸釜八幡遺跡	栗山村	縄文、近世
22	仲内遺跡	〃	縄文、古代、近世

埋蔵文化財センターでは、国や県による道路建設、工業団地造成などの公共工事に伴う事前の発掘調査を行っており、一方、市町村教育委員会では市町村が行う公共事業や民間による開発に伴う発掘調査を主に実施しています。

また、このほか県・市町村ともに史跡整備のための学術調査も行っています。



地図と前ページの一覧表の数字は赤字が埋蔵文化財センターによる調査、青字が市町村教育委員会等による調査を示しています。

掲載遺跡は平成14年2月28日に埋蔵文化財センターに情報提供されたものです。

埋蔵文化財センターが行った発掘調査から

湯西川ダム関連遺跡(栗山村)

栃木県の北西端に位置し、標高700mを超える湯西川では、春の到来・遅い雪解けを待って今年度の調査を開始しました。

仲内遺跡では、昨年度に引き続き縄文時代の遺構(住居跡・土坑)が集中する地点の調査を行いました。その結果、出土した遺物から、この遺跡が縄文時代の中期後半(4,500~4,000年くらい前)を中心とする集落跡であることがわかりました。集落は川に向かって半円形を描くように広がり、調査区の北~西側には土坑が集中する箇所があることもわかりました。



仲内遺跡全景(東上空から)

その中のS 826土坑からは、伏せられた深鉢こうぎよくせいたいしゅと伴に硬玉製大珠(ヒスイ製の装飾品と考えられるもの)が出土しました。この大珠はどこで作られたものなのかははっきりしませんが、ヒスイは、新潟県の糸魚川周辺でしか採取できないことから、縄文時代の人が広いネットワークを持って生活していたことがわかります。



S 826土坑の遺物出土状況(東から)

調査区内からは、遺物収納箱約70箱分の土器や石器などが出土しました。それらの中には、関東地方の土器に混じって南東北地方や新潟県などで出土している土器と似たものも多く見られます。これらの土器は、昨年この誌面でお伝えした複式炉と共に、この集落に住んでいた人たちが南東北地方や新潟県東部の地域と何らかのつながりを持って生活していたことを物語っています。

川戸釜八幡遺跡では、縄文時代後期(4,000~3,000年くらい前)のものと考えられる住居跡6軒、土坑・ピット約250基を確認しました。土よりも石の方が多い包含層や覆土を掘り下げる大変な調査でしたが、遺物収納箱約30箱分の土器や石器などが出土しました。今年度の調査では、これまで当遺跡内で明確に把握することのできなかつた縄文時代の住居跡を確認できたのが大きな成果でした。



S 267 竪穴住居跡(中央右寄りに石囲い炉 南から)

これまでの調査で、湯西川地内においては縄文時代の中期後半に大きな集落のあった仲内遺跡が後期になると規模を縮小し、中心となる集落が川戸に営まれるようになったことがわかりました。川戸釜八幡遺跡は、さらに南東方向に広がると予想されることから、今後調査を進める中で集落の全容が少しずつ明らかになってくると思われます。

また、この2つの遺跡から約1.5km下流の右岸段丘上に位置する石仏I遺跡では、およそ7,400m²の試掘調査を行ったところ、約1,600m²の範囲で縄文時代前期~中期の土器がまとまっている箇所がみつけられました。今年も春の雪解けを待ち、川戸釜八幡遺跡とともに調査を実施する予定です。

高林遺跡(市貝町)

高林遺跡は、芳賀町との境界に近い市貝町上根地内にある遺跡です。標高は約104mで、南北に長い平坦な台地上に遺跡があります。東側には小貝川の支流となる大川が南北に流れていて、この大川からは約5m高い場所にあります。

この地域に芳賀市貝バイパスが建設されることになり、工事に先立って平成13年10月から発掘調査を行いました。このバイパスの路線には大川を挟んだ東側の丘陵上に彦七新田遺跡があり、同じ時期に調査を行っています。

今回の調査では古墳時代後期から奈良・平安時代までの竪穴住居跡が28軒、土坑が55基、井戸跡を1基確認しました。これらの住居跡の殆どが南東方向を向いています。また、遺物としては、土師器や須恵器などの土器が収納箱で約20箱ある他に、土製の垂飾品が2点出土しました。

調査した住居跡の中には、一辺が8mから10mに建替えられた大きな住居跡が5軒あります。住居跡北側にはかまどが造られています。切石や土器などを使って頑丈に造られているものもあります。写真の住居跡(第99号遺構)はこのうちのひとつです。一辺の長さは東西・南北ともに9mで、4本の柱穴があり、北東の隅部には南北0.55m、東西1.0m、深さ0.9mの大きさを貯蔵穴が、また、北辺の中央部にはかまどが造られています。このかまどは伏せた土師器の甕を芯にして粘土を貼り付けて造られ、薪をくべる焚き口の部分は切石を「門」形に組んで粘土が崩れないようにしています。かまどの天井部分は崩れ落ちていました。ここから甕が2点出土しており、現在の「二口コンロ」のようなかまどであったと考えられます。また、この住居は一度建替えが行われ、この際に東側と南側を各々1mほど拡張していることもわかりました。

奈良・平安時代の住居跡は一辺の長さが3mから4mと比較的小さく、かまどもほとんどが壊されており、規模も大きくはありません。住居跡の中から出土する遺物は多くありません。また、この時代の遺構としては上面の直径が約5mとなる井戸跡を1基発見しました。



第99号遺構(住居跡)



第99号遺構(住居跡)カマド



高林遺跡全景



第101号遺構(住居跡)遺物出土状況



第107号遺構(井戸跡)調査風景

彦七新田遺跡(市貝町)

彦七新田遺跡は、小貝川支流の大川と古郡川の間、南北に延びる丘陵上にあります。この場所は起伏が多く、平坦な場所が少ないことから、住居跡はあまりないだろうと考えていましたが、発掘調査の結果、奈良時代を中心として古墳時代後期から平安時代のはじめ頃にかけての集落跡が発見されました。

今回の調査は県道宇都宮・茂木線建設に伴って行われました。幅約25～40m、長さ約300mの調査区内からは、カマドのある竪穴住居跡60軒、掘立柱建物10棟発見しました。主な遺物には、土師器と須恵器、鉄製の紡錘車や刀子などがありますが、全体に出土量が少ないのが特徴です。



調査区西部作業風景
(南西から)

(西から)



竪穴住居跡
(南から)



掘立柱建物跡
(南から)

また、この遺跡は、立地条件が他とは少し違う点が目立ちます。現在の水田面と遺跡の最も高い所では、約2.4mの高低差があり、事務所から作業場所に着くまでに少し息切れするくらいの傾斜地となっています。地形を少し細かくみると、いつもの小さな谷が入り込んでいるため、建物をつくるのに適した平坦地はあまり広くはありません。下の航空写真からもわかるように、場所が限られていたのか、重なって建てられている竪穴住居跡が多くみられます。なぜこのような限定された場所に住んでいたのか、遺跡の性格を考えるうえで、今後検討すべき課題であると思います。



調査区東部全景(上空北から撮影)

板倉中妻居館跡(足利市)

板倉中妻居館跡は、足利市西部の板倉町にあります。松田川と粟谷川に挟まれた平坦地のほぼ中央部、標高約73mの微高地上に位置しています。県道松田葉鹿線整備事業に先立ち、幅約15m、長さ約230mの細長い範囲の発掘調査を行いました。11月まで発掘調査を行い、10月からは調査と平行して整理・報告書作業を行いました。調査の結果、阿弥陀堂と考えられる建物跡をはじめとして、掘立柱建物跡が10棟、竪穴住居跡1軒、石組みの井戸跡、溝跡、方形



調査区全景(北上空から)

竪穴遺構、火葬墓などが発見されています。遺物は、縄文時代から中世にかけての土器片が見つっていますが、多くはすり減っていました。この遺跡は川に挟まれた場所にあるため、上流の遺跡から洪水などによって流されてきたものかも知れません。しかし、緑釉(皿)、灰釉(高台付坏)鎬連弁文の青磁(碗)や、常滑(甕)かわらけ、五輪塔(火輪)が見つかり、出土した炭の放射性炭素年代測定の結果などから、中世を中心とした遺跡であると考えられます。



発見された掘立柱建物跡(東から)

鳴井上遺跡(烏山町)

鳴井上遺跡は、烏山町の東側を流れる那珂川左岸の台地上、烏山町大字興野字下境内にあります。以前から、鳴井上遺跡は縄文時代の大規模なムラの跡として知られていました。今年度も平成12年度に引き続いて、県教育委員会の委託を受けて、重要遺跡の範囲確認調査として5月から9月にかけて発掘調査を実施しました。調査区を10箇所設けて、ムラの広がり、ムラの営まれた年代などを調べました。その結果、縄文時代の竪穴住居8軒、土坑数百基などが見つかり、およそ縄文時代のムラが那珂川に張り出した台地上全面、およそ東西200m、南北200mに広がること、

縄文時代の中でも新しい中期中葉から晩期中葉にかけての年代であることがわかりました。土器だけではなく、土偶や石棒、独鈷石などが出土しています。特に、魚網の重りに使用した土錘が多く出土しており、このムラの人々は那珂川の豊かな恵みを楽しんでいたことがわかります。

その他、新たに古墳時代から奈良・平安時代にかけての竪穴住居18軒も見つかり、この場所が縄文時代だけではなく、それ以降の時代にもムラとなっていたことなども明らかになりました。



手前に縄文時代晩期の竪穴住居跡(東から)



古墳時代後期(6世紀頃)の竪穴住居跡(北から)

特集

ながたせんげんづか 長田浅間塚(真岡市)

長田浅間塚は、真岡市の長田にあります。西側には、真岡第一～第四工業団地を南北につなぐ国道408号が通っていますが、そのバイパス(愛称・鬼怒テクノ通り)建設に伴い発掘調査したものです。

始めは、上高間木西古墳という名前でした。直径約20.0m、高さ約2.4mの円墳で、古墳時代の終わり頃のものと考えていました。この時期の古墳は、群集墳と言って、複数の古墳がまとまっていることが多いので、周辺にも墳丘の消滅した古墳があると思われました。そのため、トレンチを設定して確認調査を行いました。



長田浅間塚(北東から)

ましたが、何も見つかりませんでした。

さらに、円墳自体も周溝や主体部が見つからなかったこと、盛り土の中から江戸時代の古銭が出土したことなどから、近世の塚として考えるようになりました。その結果、字名である「長田」と、頂上に祀られた祠が浅間神社であることから「浅間」の名を取り、長田浅間塚と名前を変えました。

浅間神社は木花開耶姫このはなさくやひめと言う神様を祀り、富士山信仰に非常に関係の深い神社です。と言うことは、この塚から富士山を眺めていたのでしょうか。



発掘調査風景(南東から)

東谷中島地区遺跡群

東谷中島地区遺跡群は、都市基盤整備公団が実施する東谷中島土地区画整理事業地内にある遺跡群です。平成6年度から発掘調査を実施しており、旧石器時代から近世に至る様々な遺構・遺物が多数発見されています。ここでは平成13年度に発掘調査を実施した西刑部西原遺跡5・6・7区を紹介いたします。

西刑部西原遺跡5区

昨年度調査した3区の南側で古墳・奈良・平安時代のムラの続きと思われる住居跡3軒と土坑数基、円形周溝遺構1基を確認しました。

西刑部西原遺跡6区



西刑部西原遺跡全景(5・6・7区)

道路跡1地点、古墳1基、溝1条、縄文時代と推定される土坑3基がありました。琴平塚14号墳の周堀の中からは、大きな蓋石の箱形石棺が発見されました。また、道路が微妙に古墳をよけて造られている様子が観察できました。

西刑部西原遺跡7区

5区の南側で住居跡5軒、土坑4基、円形有段遺構1基、道路跡1地点を確認しました。道路下には縄文時代の土坑があり、その上の路面を固める基盤工事と思われる跡がよく観察されました。



「東山道」と推定される道路跡と断面

のざわいせき
野沢遺跡

現地説明会資料 2001年10月13日(土)

一般国道119号改築事業
(宇都宮北道路)に伴う埋蔵文化財発掘調査
栃木県宇都宮市野沢町

(財)とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター
栃木県下都賀郡国分寺町大字国分乙474
TEL 0285(44)8441(代)

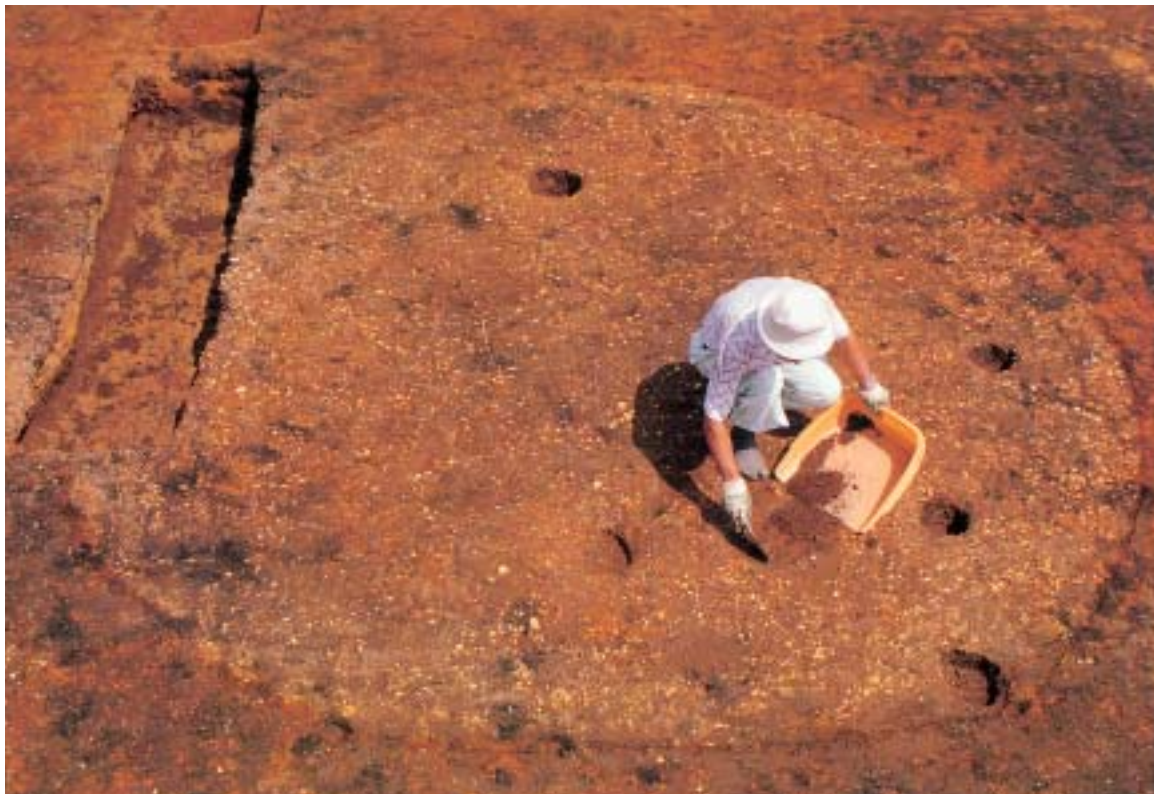
はじめに

野沢遺跡は、宇都宮市街地の北西約6kmに位置し、田川の西岸で東弁天沼に面した台地上にあります。以前から、弥生時代中期(今から約2,000年前)の人面付土器が出土した遺跡として有名でした。

今回、宇都宮北道路の建設に先だって、発掘調査が実施されました。その結果、県内で最も古い縄文時代草創期(今から約13,000~10,000年前)の竪穴住居跡が2軒発見されました。

この他にも、縄文時代前期中頃(今から約5,500年前)の竪穴住居跡や落とし穴が見つかっています。また、室町時代から戦国時代(今から約600~500年前)の地下式塙や井戸跡、方形竪穴遺構(建物跡)や、約450基もの土坑墓から構成される墓地跡も見つかりました。

このような、発掘成果を広く皆様に知って頂くために今回の現地説明会を開催することになりました。文化財に対するご理解をより一層深めていただくことになれば幸いです。



縄文草創期の竪穴住居跡確認状況(4号住居跡・南から)

空から見た野沢遺跡(上方が東)

東弁天沼



室町～戦国時代の遺構



⑤ 地下式壙(277号土坑・南東から)



⑥ 方形竖穴遺構(166号土坑・南から)

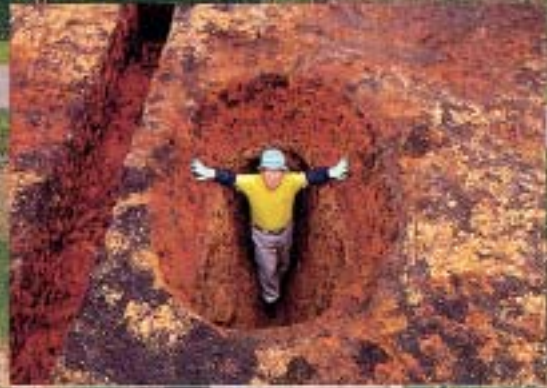
縄文時代の遺構



草創期の竪穴住居跡(5号住居跡・西から)



前期の縦穴住居跡(2号住居跡・南から)



落とし穴(307号土坑・南から)



6

7



8



井戸跡(105・106・110・112号土坑・南から)



溝跡(1号溝跡・東から)

県内最古の竪穴住居跡

今回の調査で発見された縄文草創期の竪穴住居跡は4号と5号住居跡の2軒です。4号住居跡は直径3.8m、5号住居跡は直径2.7mの円形で、住居内には男体山から約13,000～12,000年前に噴出した今市軽石と七本桜軽石の混土が10cmほど堆積していました。この埋め土中からは、石鏃(石のやじり)28点の他、尖頭器(槍先につける石器)、削器(ものを削る石器)、磨石(木の実などを磨りつぶす石器)などの石器や、剥片(石器を作るときにでる石屑)がたくさん出土しました。また、表面に文様のない無文土器の破片が出土しています。

土器に付着していた煤と、床に残っていた炭片を放射性炭素年代測定により分析したところ、いずれの住居も約11,900～11,700年前との数値が得られました。この数値は、縄文草創期中頃にあたり、県内では最も古い竪穴住居跡になります。

栃木県で縄文時代草創期の遺構は、洞穴遺跡の宇都宮市大谷寺遺跡と落とし穴が多数発見された茂木町登谷遺跡があるだけです。これまで県内で最も古い竪穴住居跡は、縄文時代早期前半の宇都宮市清陵高校地内遺跡の住居跡でしたが、今回発見された住居跡はこれを更にやく2,000年遡ることとなります。なお、全国でも草創期の竪穴住居跡の発見例は、20遺跡38例しかありません。



縄文草創期住居跡出土遺物

みねたかまえ いせき
峰高前遺跡

現地説明会資料 2001年12月1日(土)

北関東自動車道建設事業
に伴う埋蔵文化財発掘調査

(財)とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター
栃木県下都賀郡国分寺町大字国分乙474
TEL 0285(44)8441(代)

はじめに

峰高前遺跡は、栃木県の南東端に位置する二宮町のほぼ中央部にあります。
真岡鉄道久下田駅から北東に約5kmの水田と畑に囲まれた静かなところ
です。ここは、小貝川、五行川によってつくられた肥沃な低台地上にあり、付近には
多くの遺跡が存在します。この場所に、日本道路公団が北関東自動車道を建設
することになり、工事に先立ち、埋蔵文化財センターが本年4月から発掘調査
を行ってきました。その結果、古墳時代から奈良・平安時代にかけての家の跡
や当時の人びとが使った土器などが多数出土しました。

今回の現地説明会は、これまでの発掘調査の成果をご覧いただき、郷土の歴史
に一層の関心をもっていただく機会になればと思い、計画しました。



: 峰高前遺跡の場所 (1:50,000)



発掘作業風景



発掘作業風景



古墳時代のカマドと土器

密集した家の跡

峰高前遺跡の調査は、建設される道路部分の南北に細長い区域で行われました。幅約50m、長さ約100mという比較的狭い場所でありながら、昔の家の跡が50軒以上も見つかりました。これらの家は、古墳時代・奈良時代・平安時代のものでした。

この頃の家は、地面に四角の穴を掘り、木の柱を4本立てて、わらなどで作った屋根をのせたものが多く、たてあなじゅうきょ 竪穴住居といわれています。大きさは、一辺が4mから10mくらいでさまざまです。

発掘された竪穴住居の跡は、写真の6号・7号住居跡のように、同じ場所に、重なって建てられている場合も多く、密集した状態になっています。



竪穴住居の跡(8号住居跡)



5号(奥)・6号(中)・7号(手前)住居跡

古墳時代前期の竪穴住居の跡

調査した中で、一番古い竪穴住居の跡は、古墳時代をはじめ(今から約1,700年前)の頃のもので、5号住居跡など、5軒見つかりました。二宮町では、この時期の遺跡は少ないので、ここから出土した土器は貴重な資料になります。

特に、5号住居跡の柱の穴からは、完全な形の土器(甕)が、さかさまで見つかりました。ここに住んだ人は、家を使わなくなって柱を抜いた後に、わざと土器を埋めたようです。なぜ、このようなことをしたのでしょうか。

この時代の住居は、家の中に炉(いろり)がつくってあります。家の中で火をたいて、食べ物を煮炊(にた)きしたり、暖(たん)をとったりしたようです。



5号住居跡



さかさまに埋められた土器



炉(7号住居跡)

古墳時代後期の竪穴住居の跡

峰高前遺跡の住居の跡で、一番多いのは、古墳時代後期(約1,500～1,300年前)のもので、37軒あります。

この時期には、食べ物の煮炊きの場合は、炉からカマドにかわります。カマドは、ふつう、家の北側^{かべ}の壁きわに、粘土などを用いて作ってあります。火をたく部分の先は、外に煙を出すようにしてあります。さらに、石や土製の支え^{どせい ささ}を用いて、土器を置くための工夫をしているものもあります。

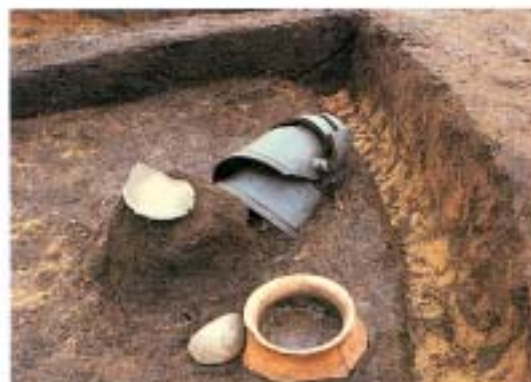
当時の土器は、土師器と呼ばれる赤褐色をしたものが多く、食べ物の盛り付けにつかったお椀^{わん}のようなもの(杯^{つき})や、なべのようなもの(甕^{かめ})などがあります。また、この時期には、中国や朝鮮半島の国々の技術も取り入れられて、固くて青みを帯びた須恵器^{おすえ}なども作られました。(写真の須恵器は、米を蒸すための道具^{こしき}で、甑^むといいます。)



カマドの断面



カマドと土製の支え



土師器(下)と須恵器(上)

奈良・平安時代の竪穴住居の跡

奈良・平安時代(約1,300～800年前)の住居の跡は、13軒見つかりました。この時期になると、古墳時代のものにくらべて小さくなります。また、壁で屋根を支えたため、柱の穴がなくなる住居も作られるようになります。

そのような住居の跡の中で、19号住居跡は、カマドが住居の北東^{かど}の角にあり、南東部の壁面^{へきめん}には棚^{たな}のようなものが作られています。このような住居はめずらしいので、今後の研究のためのよい資料になります。



19号住居跡



19号住居跡のカマド



棚状施設

古代から中世へ

今まで紹介してきたように、峰高前遺跡からは、古墳時代・奈良時代・平安時代という古代の住居の跡がたくさん発見されました。ところで、古墳時代の住居跡が37軒も見つかったということは、ここは、当時、比較的大きなムラだったと考えられます。しかし、奈良・平安時代の住居は、わずか13軒しか見つかりませんでした。ムラが移動したのでしょうか。それとも、ムラが分かれてしまったのでしょうか。

鎌倉時代(約800～700年前)から室町時代(約700～400年前)にかけての中世については、今回の調査では、住居の跡は、1つも見つかりませんでした。では、人びとは、まったく住んでいなかったのかというと、そうではありません。

この発掘現場の中央に、東西に走る深い溝が見つかりました。薬研堀という掘り方をしており、中世以降のもので、この時期に、峰高前遺跡の北東約150m付近に「峰高城」という武士のかしらの館があったということですから、この館と関係があるのではないかと考えられます。



⑮中世の溝の発掘作業



⑯峰高城の場所（奥の木の周辺）

おわりに

峰高前遺跡の調査により、古代から中世にかけて、この付近は、大きなムラであったことが確認されました。そして、二宮町では明らかでなかった古代の生活のようすを知る貴重な資料がたくさん得られました。

今回は、調査でわかったことの概要を紹介させていただきました。これを機会に、郷土の成り立ちやみなさんの祖先のくらしぶりが分かる貴重な文化財を大切にしようという気持ちを一層深めていただけたなら幸いです。



⑰遺跡見学会（物部小学校）



⑱発掘作業風景

現地説明会資料 2002年1月26日(土)

いそ おか きた こ ぶん ぐん
磯岡北古墳群 (杉村遺跡XVII区)
すぎむらいせきじゅうななく

都市基盤整備公団による東谷・中島土地
区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査
栃木県宇都宮市砂田町

(財)とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター
栃木県下都賀郡国分寺町大字国分乙474
TEL 0285(44)8441(代)

はじめに

遺跡の所在する東谷・中島地域は古墳時代の中ごろ(今からおよそ1,500年～1,600年前)に、当時「下毛野」と呼ばれた^{しもつけぬ}栃木県地域においてもっとも大きな古墳やムラが作られたところです。また、奈良時代には下野国河内郡に属し、周辺には上神主・茂原遺跡なども存在する、古代史研究の上で重要な地域です。

杉村遺跡は平成7年度以降継続して発掘調査を実施しており、本年度は古墳群(有力者のお墓である「古墳」が集まっているところ)を調査しています。古墳は土地が盛り上がっていたため、発掘前からその存在が確認されており、杉村遺跡のうちの古墳群だけを指して「磯岡北古墳群」と呼んでいます。調査の結果、栃木県内ではあまり例のない5世紀の群集墳であることが判明し、貴重な資料を得ることができましたので、ここにその概要を説明することとします。

周辺の古墳

古墳は葬られた人の政治力や財力を反映していると考えられています。またそこから当時の社会のあり方を考える手がかりになります。栃木県内で古墳が作られ始めるのは古墳時代前期、4世紀と考えられていますが、東谷・中島地域で古墳が作られ始めるのは、古墳時代中期の初め頃、5世紀前半です。それより古い前期の古墳は今のところ発見されていません。周辺で前期に古墳が作られるのは東谷・中島地域の西側台地上の茂原地域で、大日塚古墳、愛宕塚古墳、権



杉村遺跡(磯岡北古墳群)(上空から)

現山古墳といった3つの前方後方墳が相次いで築造されています。茂原地域ではこの3古墳に続く、中期の大きな古墳は見つかっていません。それに対して東谷・中島地域では、中期になると笹塚古墳が作られます。笹塚古墳は全長100mと大きく、この地域では最も早く円筒埴輪を立ててならべていたことから、茂原地域で古墳を作った勢力とは違った性格を持っていたと言えます。

あたかも古墳を作る勢力が茂原から東谷に移動したかのような印象を受けますが、大きな古墳が一定の地域の中で少しずつ場所を変えながら築造が続けられる例は全国的にも多くみられます。東谷・中島地域では他にも双子塚、松の塚古墳が作られ、東谷古墳群を形成していますが、5世紀後半には西川田地域の塚山古墳群が大きさ、埴輪の使用量とも東谷・中島地域を上回ります。さらに、5世紀末から6世紀初頭には小山地域の摩利支天塚、琵琶塚古墳が築造されます。このとき古墳の大きさは栃木県で最高潮に達します。このような流れの中で、磯岡北古墳群は5世紀中頃、笹塚古墳が作られた直後に形成されたと考えられます。

群集墳について

群集墳とは、古墳群の中でも古墳同士が接するほど密集し、あたかも定められた範囲の中に次々と古墳が築造されたように見えるものを言います。もともと古墳は共同墓に比べてかけ離れた大きさを持っていますが、群集墳は規模の差があまりなく、共同墓地的色彩が強いと言われています。これは、今まで古墳を作り得なかったひとびとが、力を蓄えて古墳を作ることができるようになったためと解釈されています。ただ、墓が群集することは古墳時代以前にも認められる現象なので、そのような伝統が受け継がれたものとみる意見もあります。いずれにしろ、磯岡北古墳群は、笹塚古墳を除けば、東谷・中島地域で最初に築かれた墳墓であり、そのような墳墓を持つことができ



磯岡北1号墳から土器が出土した状況
須恵器杯身と大型甕（ばそう）、土師器高杯が
一括して置かれた状況が分かります。



磯岡北2号墳から土器が出土した状況
須恵器大甕が砕かれてばらまかれた状況が
分かります。



磯岡北5号墳から土器が出土した状況
須恵器大甕が堀の中に置かれて、その場でつぶ
れた状況が分かります。



磯岡北9号墳から土器が出土した状況
土師器碗が堀に投げ込まれた状況が分かります。
白く見えるのは火山灰です。

る集団がこの地域で成立したことの意味は大きいと言えます。笹塚古墳ほどの規模ですと周辺の多くのムラの人々が共同して作りましたが、磯岡北古墳群の規模であれば隣接するムラに住んでいたひとびとが作った可能性があります。

磯岡北古墳群について

磯岡北古墳群は、南北にのびる細長い台地の西端に位置し、杉村遺跡の北端に相当します。北側には中島笹塚遺跡が隣接し、その中にも古墳があります。西側は低湿地に面し、その向こうには立野遺跡があります。東側には奈良時代の東山道と推定される道路跡があり、さらに谷を隔てた東側には、より新しい時期に作られた^{ことひらづか}琴平塚古墳群が存在します。

古墳は現在9基確認していますが、未発見のものがある可能性もあります。古墳同士の間隔は1号墳と2号墳、3～8号墳の間が狭く、特に3号墳と8号墳の間には小型の4～6号墳を無理して押し込んだような印象を受けます。9号墳だけがやや南側に離れて存在しますが、これは8号墳と9号墳の間に浅い谷があるためと考えられます。出土した土器の形や古墳同士が重複しないことから判断すると、それぞれの古墳があまり時間をおかずに、いちどきに作られたと考えられます。

古墳の形はすべて円形です。最も大きいのが3号墳で直径2.1m・堀の底からの高さ2.7m、最も小さいのが6号墳で直径5m・堀の深さ0.12mです。どの古墳でも堀の中ほどの深さに、6世紀の初め頃に群馬県の榛名山(二ツ岳)が噴火した時に降り積もった火山灰の層が見られました。このことから、火山灰が積もる前には、既に古墳の堀は作られていたことが分かり、これらの古墳が築造されたのは噴火前で、5世紀の中頃と判断できます。また堀の中からはたくさんの土器の破片が出土しています。葬式に参列した人たちの会食か、または死者に食物を捧げる儀礼に使った食物や飲物の器と考えられます。埴輪は1・2・8・9号墳で発見されていますが、少量なので墳丘に並べられていたかどうかは不明です。鉄器では鎌、刀子、剣、鉾、鉄鏃が見つかっており、副葬品と考えられますが、もと置かれた場所から動かされた状態で、埋葬施設として明確に判断できるものではありませんでした。

今回の調査で注目されるのは須恵器の多さです。須恵器は朝鮮半島からもたらされた、窯により高温で焼く技術によって作られた焼き物です。今回発見されたものはいずれも初期の須恵器で、この時期には大阪や愛知など特定の地域でしか生産されていないので、すべて県外から運ばれてきたものと考えられます。その意味では当時にとっては貴重品であったはずですが、単に財力があるだけではなく、そのような稀少なものを手に入れることのできる集団または人物がこの地にいたことを示す貴重な証拠と言えます。もう一つ特筆すべきことは、その須恵器から推定できる年代です。出土した須恵器は5世紀中頃と考えられ、それ以外の土器をほとんど含まないことから、古墳の築造もそれとあまり変わらない年代と考えられます。群集墳で圧倒的に多いのは、6世紀後半から7世紀初頭に作られた、内部に横穴式石室を持つものです。それに比べると磯岡北古墳群はそれより古いものであるため、古式群集墳と呼ぶこともできます。



磯岡北9号墳から出土した鉄剣



磯岡北9号墳から出土した鉄鏃



土壙墓

磯岡北2号墳と3号墳の間にあります。黒い部分を掘ると長方形の穴になりました。



埴輪棺

磯岡北9号墳の西側にありました。浅く掘り窪めた穴の中に入っていました。



磯岡北2号墳調査風景

古墳の盛り土と掘の埋まった土の違いを見極めながら注意深く掘り進みます。



磯岡北2号墳調査風景

古墳の大きさを掘っている人の大きさと比べてみてください。

どこうぼ 土壙墓

中に何も残っていなかったのですがその性格が不明であるものの、古墳時代に降ったと思われる火山灰の粒が入っていた穴がありました。しかし、昨年度の調査で同じような穴の底から鉄鐸と鉄鍬が副葬品として置かれているのが見付き、墓であることが判明したので、この穴も同様に墓であると判断することができました。これでこの地点の土壙墓は、昨年発見されたものと合わせて4つあることが分かりました。古墳に葬られた人と関係のある、それよりも少し身分が低いひとびとの墓と思われます。

埴輪棺

埴輪はもともと古墳の表面に立て並べるものですが、遺体を入れる棺として転用されたものもあります。9号墳の西側から発見された埴輪棺は二つの円筒埴輪の口を合わせて作られています。埴輪の表面には銀杏の葉のような独特な記号がへらで描かれています。このような記号は塚山古墳群の埴輪からも発見されており、何らかの関連があると考えられます。土壙墓と同じようなひとびとの墓と考えられます。

おわりに

磯岡北古墳群は、東谷・中島地域では最も古い群集墳です。近くの東谷古墳群を築いた支配者たちにしたがって立野遺跡や杉村遺跡に住んだ人たちと係わりと推定され、古墳時代の須恵器や鉄器は他の地域から持ち込まれた可能性が高いものです。

今後、古墳の検討とともに同じ地区内の集落遺跡との比較検討が大きな課題です。

平成14年3月16日 現地説明会資料

しも かげ い せき 下 陰 遺 跡

—北関東自動車道建設事業に伴う

(財)とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター

埋蔵文化財発掘調査—

国分寺町大字国分乙474

栃木県真岡市八木岡

TEL 0285(44)8441 (代)

はじめに

下陰遺跡は、真岡市の中心部から南西3kmに位置し、宝積寺台地から五行川低地へ続く、なだらかな斜面にあります。

このたび、日本道路公団で北関東自動車道を建設することになったため、工事に先立ち、埋蔵文化財センターが去年7月から下陰遺跡の発掘調査を行ってきました。遺跡の周辺が高速道路のパーキングエリアになるため、広い面積が発掘調査され、その結果、縄文時代から江戸時代まで、さまざまな遺構や遺物が発見されました。主なものでは、縄文時代の袋状土坑、古墳時代の方墳、竪穴住居跡、道路の跡、室町時代の溝・墓坑などがあげられ、当時の土器・陶磁器などが出土しています。

今回の現地説明会では、これまでの発掘調査の成果を広く皆様にご覧いただき、このことが郷土の歴史に一層の関心を持っていただく機会になればと思います。



南上空から見た下陰遺跡（矢印：背後は真岡市街）



① 縄文時代の土坑（墓穴）

後期の初め頃の墓穴から、急須のような形の「注口土器」が発見されました。周辺には同じ形の墓穴がいくつか集まっているようです。



② 古墳時代の方墳

古墳時代前期の終わりから中期初め頃の古墳が発見されました。周囲に幅の広い溝が巡りますが、盛り土はすでに無くなっています。



③ 道路遺構

道路の基礎工事跡が形の浅い穴を横に並べ、黒土を入れて地固め



発掘調査区の全景（南西上空）



④ 竪穴住居跡

発見されました。楕円で掘り、その中に小石を行っています。

竈(かまど)の跡が複数確認され、竈を何度か作り直しているようです。出土した土器などから、平安時代前期の住居跡と推定されます。



⑤ 室町時代の橋脚

大きい溝が10本以上発見されました。これらは土地や屋敷などの境であったと思われます。この溝では、木杭の橋脚が残っていました。



⑥ 室町時代の溝

これも⑤と同様の溝で、薬研堀(やげんぼり)という形です。断面がV字形で、上幅に比べて底の幅が極端にせまくなっています。



⑦ 方形竪穴(ほうけいたてあな)遺構

方形の浅い穴で、両辺の中央に柱穴があります。墓地の施設とする説もありますが、用途は、はっきり分かりません。⑤・⑥と同時期と思われます。



⑧ 室町時代の土坑群

長さ2m未満の方形の穴が、せまい範囲に多数掘られています。そのため、隣の穴を壊して掘っているものもあります。墓穴の可能性がります。

から)

まとめ

これまで説明してきたように、今回の下陰遺跡の発掘調査では住居跡、古墳、溝など、長い時代にわたる様々な種類の遺構が発見されました。

縄文時代では中期の竪穴住居跡や貯蔵穴が発見されました。そして、後期の初めには墓地も造られるようになります。

古墳時代になると、方墳（四角形の古墳）が出現します。真岡市内では下陰遺跡の北西約2kmの稲荷山遺跡で、ほぼ同じ時期の方墳が5基発見されています。また、これよりやや新しい時期の竪穴住居跡も発見されています。平安時代の前期になると、この場所に再び竪穴住居跡が出現します。また今回発見された道路の跡は、今の感覚では幅がせまく思われますが、造りが非常に丁寧で、重要な道であったのでしょうか。古代の遺物が出土しているので、この時期までさかのぼる遺構なのか検討しています。

さて、今回の発掘調査では、室町時代の遺構が最も多く、かつ広い面積にわたって発見されました。真岡鉄道をはさんで大きな溝が発見されましたが、おおよその傾向として、溝に囲まれた内側に遺構が多く、外側はそれに比べるとまばらです。内側には、掘立柱建物や柵などの建造物があり、外側には墓などがあったようです。ところが、溝の内側にも墓穴が見られるため、時期によって区画や、土地の利用方法などが少しずつ変化していたことがうかがえます。付近には「市場」などといった小字名も残されており、当時の下陰遺跡の性格を考える上で参考になるのかも知れません。

いずれにしても、今回発掘調査した範囲は、遺跡の南の境界部分だったようで、溝の外側の低地一帯では遺構の密度は薄くなります。おそらく五行川の氾濫にもしばしばさらされたのでしょう。一方、遺跡のすぐ南には五行川に臨んで八木岡城跡が存在します。この城については文献の面でも不明な点が多いようですが、室町時代の遺構として、下陰遺跡と時期的に重なる部分があります。両者の関係については、今後の研究課題ですが、今回の発掘調査が貴重な事例を提供したと言えそうです。



低地部分の発掘状況



発掘調査風景

平成14年3月23日 現地説明会資料

ちょうじゃ が だいら い せき
長者ヶ平遺跡

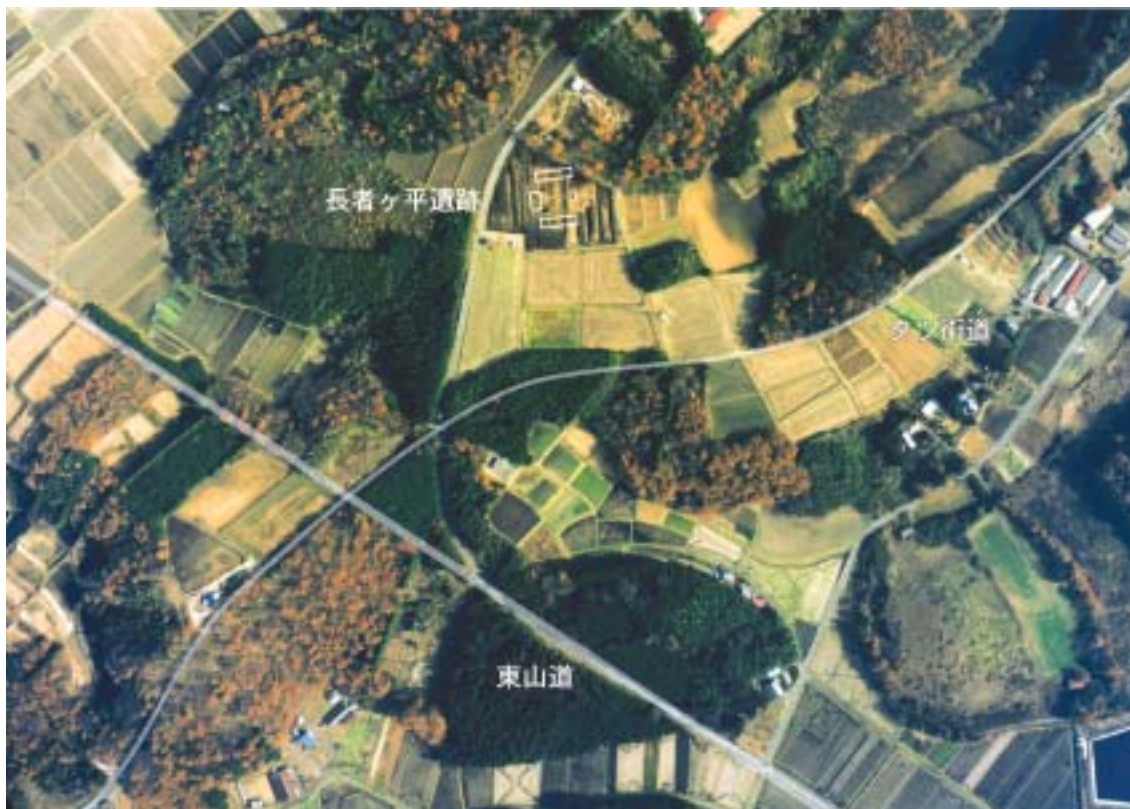
— 重要遺跡範囲確認調査 —
栃木県那須郡南那須町鴻野山字長者ヶ平

(財)とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター
栃木県下都賀郡国分寺町大字国分乙474
TEL 0285(44)8441(代)

1 はじめに

長者ヶ平遺跡は、鬼怒川の氾濫源から上がった喜連川丘陵上にあり、長者伝説に伴う「焼け米」が採取できることで、古くは江戸時代から知られていました。近年では、すぐ近くを東山道が通ると推定され、古代を思わせる地名(厩久保、馬場ヶ平など)が残っていることなどから、古代下野国芳賀郡に置かれた「新田駅家」ではないかとも考えられてきましたが、その正体は、長く不明のままとなっていました。

そこで、平成13年10月から財団法人とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センターが栃木県教育委員会からの委託を受け、この遺跡の実態を解明するための発掘調査を行ってきました。その結果、大型の掘立柱建物跡が数多く発見され、古代の官衙関連施設(行政施設)であることが明らかになってきました。



長者ヶ平遺跡と東山道位置図(西上空から)

2 調査の概要

今年度は、焼け米が採集される丘陵上の平坦部(約10,000m²)を調査しています。調査の結果、大型の掘立柱建物跡13棟、ほったてばいらたものあと 竪穴住居跡9軒、たてあなじゆうきょあと 大型の土坑2基などが発見されました。どころ

特に注目されるのは、南面する正殿せいでんを中心に東と西に長大な脇殿わきでんを配置した大型の掘立柱建物跡群が発見されたことです。このように、建物が「コ」の字型に配置される例は、古代の官衙(役所)の中核施設になると考えられています。また、この大型掘立柱建物跡群よりも古い時期の大型掘立柱建物跡や新しい時期の掘立柱建物跡なども発見されていることから、本遺跡が長い間、官衙として機能していたことが明らかになってきました。

3 「コ」の字型配置の掘立柱建物跡群

南面する正殿の前面に、長大な東脇殿ひがしわきでん、西脇殿にしわきでんを左右対象に「コ」の字型に配置し、南門みなみもんを置いています。建物間の距離は、正殿から南門までが約36m(120尺)、東脇殿と西脇殿間も約36m(120尺)で



調査区全景(真上から)

すから、正殿前面には3.6m四方の広場が設けられています。ただし、これらの建物群を囲む塀などの区画施設は確認されていません。

正殿跡

東西13.0m(5間)、南北5.5m(2間)の東西に長い掘立柱建物跡で、三面(南・東・西)に1.8mほど出る庇が付いています。建物は3時期あり、2時期目は同規模でやや東寄りに建替え、3時期目は東西13m(5間)、南北5.5m(2間)とやや小さくなり、南側だけに2.1mほど出る庇が付いています。なお、正殿南東部には、正殿よりも古い南北棟の掘立柱建物跡や竪穴住居跡も発見されています。

東脇殿跡

南北35.5m(12間)、東西4.8m(2間)の南北に細長い掘立柱建物で、正殿と同じく2度の建替えがあります。建替えに際しては、6m(20尺)ほど東側(外側)に移動させています。

西脇殿跡

東脇殿とほぼ同規模、同形態です。建替えの位置も東脇殿と同じく3m(10尺)ほど西側(外側)に移して、正殿前面の広場を幅3.6m(120尺)から4.5m(150尺)と広くしています。ただし、正殿や東脇殿と異なり、建替えは1度だけです。

南門跡

格式の高いとされる^{はつきやくもん}八脚門ですが、正殿の真正面ではなく、わずかに東に寄った位置にあります。規模は東西5.4m(3間)、南北3.6m(2間)で、1度だけ西側に移動して建替えています。



正殿跡(北から)



東脇殿跡(北から)



西脇殿跡(北から)



南門跡(西から)

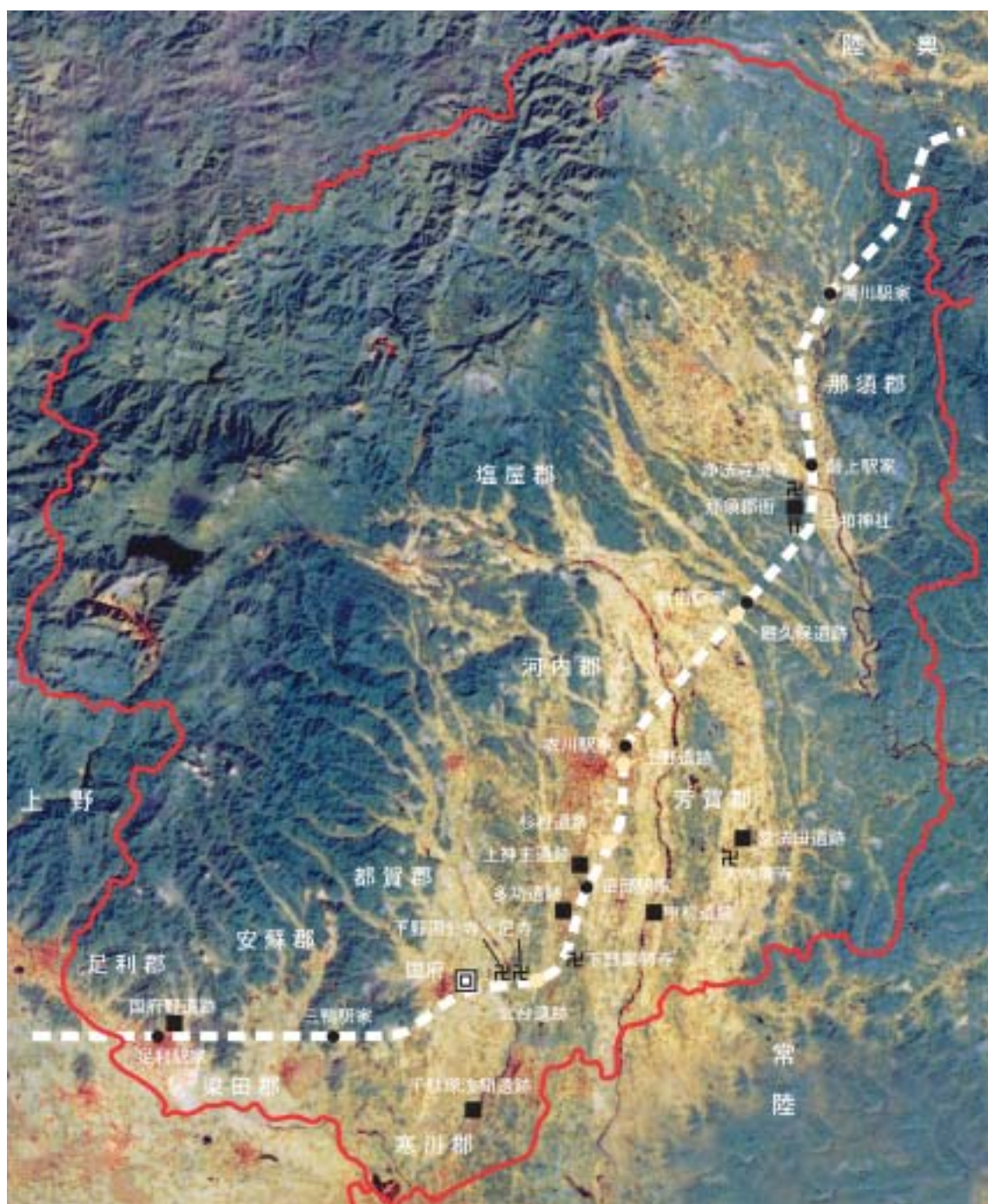


調査区全景・「コ」の字型配置(北から)

4 まとめ

発掘調査途中であるため、今後に多くの課題を残す結果となりましたが、今回の調査では、大型の掘立柱建物群の重複関係から大きく5時期の変遷が確認できました。各時期の年代については、今のところ決定づける良好な資料は発見されていませんが、建物群とその周辺からわずかに出土した土器片などを参考にすると、奈良時代から平安時代(8~9世紀代)にかけての時期であると考えられます。

また、大型の掘立柱建物群が「コ」の字型に整然と配置されていることから、長者ヶ平遺跡は古代の官衙関連施設になることが明らかになりました。しかし、この施設が「駅家」になるのか、



下野国内の官衙跡／寺院跡位置図

市町村教育委員会が行った発掘調査から

瓦塚古墳群(宇都宮市)

瓦塚古墳群は、宇都宮市長岡町の丘陵上にある古墳時代後期(6世紀末)の古墳群です。前方後円墳1基と円墳41基の市内では現存する最大の古墳群で、そのうち前方後円墳は平成7年に市指定文化財になっています。

前方後円墳(瓦塚古墳群24号墳)は明治30年頃に一度発掘調査が行われており、墳丘平面や石室内部の見取り図が作成されたほか、内部より切小玉等の遺物や人物埴輪等が確認されています。しかしそれ以外の詳細については不明な部分が多く、平成3年に作新学院高等部社会クラブにより墳丘調査が行われたのみでした。しかし平成10年に地元の人々が中心となって瓦塚古墳群愛護会が結成され、毎年除草作業等を行いながら看板やベンチの設置等、周辺整備等が行われてきました。そこで宇都宮市もその中心となる24号墳の規模や構造を解明し、整備を行うため平成13年8月から約2ヵ月間、調査を実施しました。なお調査は平成15年まで夏期に実施する予定です。

調査は古墳を傷めないように、墳丘の表面に敷き詰められた葺石の上に堆積した土を取り除き、また明治の調査以降に埋まってしまった石室内部の正確な図面を作成するだけとしました。

しかし後円部頂上から石室にまで至る深さ2m以上の大きな攪乱があり、玄室の天井石1枚が抜き取られていました。またこの際に隣接する天井石が崩れ、壁面もかなり傷んでおり、内部の調査はほぼ不可能な状態でした。これは明治の調査以降に行われた盗掘の跡とされます。しかし奥壁と一番奥の天井石及び玄門上部の天井石は無傷で残っており、流紋岩と思われる大きな一枚岩であることが確認できました。また倒れた閉塞石の状況から追葬が行われた様子が窺えました。

墳丘の調査では墳頂部と墳丘中段の平坦面には円筒埴輪が並んで立っていたことが確認されました。特に墳頂部の埴輪列はすべて上部が折損していましたが、基部はかなり密接して立っていました。形象埴輪は人物(女性頭部、胴部)ユキ、盾、馬、家等が出土しました。また頭部を欠いた人物埴輪の胴部が墓道入口付近のテラスに直立しているものが確認されました。また葺石は2段築成の墳丘の上段のみに施されており、下段には確認されませんでした。

(宇都宮市教育委員会 大塚 雅之)



古墳全景(南東より)



墓道より石室を望む



人物埴輪の出土状況



発掘体験風景

桃花原古墳(壬生町)

桃花原古墳は、壬生町北西部の羽生田地区にある古墳です。羽生田地区には、この他国指定史跡の茶臼山古墳、県指定史跡の長塚古墳や富士山古墳などがあり、古代下毛野国を代表する大型古墳が集中しています。

とくに、茶臼山古墳と富士山古墳からは、高さが1mをこえる大型の円筒埴輪とともに、人の背丈ほどの大型の家型埴輪が出土しており、羽生田地区に眠る権力者の力の大きさを物語っています。

桃花原古墳の発掘調査は、古墳の正確な範囲と構築状況を確認することと、石室部の残存状況を確認することを目的に行いました。

その結果、桃花原古墳は三段につくられた直径6.3mの円墳であることが確認されました。墳丘の周囲には、幅約9m・深さ1.6mほどの周溝(空堀)が巡っています。また、墳丘の第二・第三段目の斜面には、人の頭大の河原石(葦石)でおおわれていることもわかりました。

次に、死者を埋葬する石室は大きな盗掘を受けていることが確認されましたが、石室の前面に広がる「前庭部」といわれる施設がほぼ完全な形で残存していることがわかりました。

「前庭部」は、墳丘の南側を「コ」の字状に切り込みつくられています。「前庭部」の表面は河原石でおおわれており、石室への通路部分と通路の両側にある一段高い平坦部とからなっています。西側の平坦部からは約100本ほどの鉄鏃とともに、金銅張りの馬具や須恵器(壺・高坏)・土師器(坏)が出土しました。この「前庭部」については、死者を埋葬するときのお祭りが行われた場所と考えられています。

今回の調査から、桃花原古墳は7世紀前半につくられた古墳であり、羽生田地区最後の権力者の墓であることが確認されました。

(壬生町教育委員会 君島 利行)



前庭部 (南西より)



桃花原古墳遠景 (東より)



墳丘東側・葦石確認状況 (東より)



鞍金具出土状況



周溝・南東部 (南より)



直刀・刀子出土状況



鉄鏃出土状況

かめやまきた いせき
 亀山北遺跡(真岡市) 

亀山北遺跡は、真岡市西部の台地の間を流れる江川の西側の縁にあります。新しく市道を建設する予定地にあるため、平成13年7月から12月まで発掘調査を行いました。

調査の結果、この遺跡は4世紀前半(古墳時代の初め頃)の村の跡だということがわかりました。しかも、15軒もの竪穴住居跡が見つかり、この時代としては今のところ、芳賀地区で最も大きなムラであったと考えられます。

また、この遺跡からは土器の口の部分がアルファベットのS字のように曲がった甕(S字状口縁)がたくさん出土しました。他の古墳時代前期の村に比べて、S字甕の割合が突出して多い遺跡です。S字甕は東海地方の人たちが用いた土器であることから、亀山北遺跡の地に村を営んだのは、東海地方の人々の影響を強く受けた人々だったと考えることができます。

さらに、1号住居跡からは、鍛冶屋さんが鉄を造った時にでる滓(鉄滓)や飛びちった火の粉が空気中で固まったもの(粒状滓)や、焼けた鉄がはがれたもの(鍛造剥片)、さらに焼けた鉄をたたいた鉄床石(溶けた鉄が付着している)などが、捨てられた状態で見つかり

ました。もちろん鉄製品(直刃鎌ちよくじんがま)も出土しています。それらと一緒に鉄を溶かした炉の壁や鍛冶炉に空気を送る羽口はぐちの破片も棄てられていたので、鍛冶屋の家を何らかの理由で壊し、鍛冶関係のもの全てをこの住居跡に棄てたのではないかと考えています。

今回の調査では、平安時代(9世紀)の住居跡も1軒、見つかりました。東に竈かまどをもつこの家からは、緑色の上葉を塗った緑釉陶器りよくゆうとうきや灰色の上葉を塗った灰釉陶器かいゆうとうきが出土しました。これらの土器類は、当時の一般の人たちがもつことができる物ではありません。そんな土器がどうしてこの家から出てきたのかは、わかっていません。

亀山北遺跡の他にも、稲荷山遺跡や伊勢崎Ⅱ遺跡・亀山原遺跡(旧赤曾西遺跡)など、江川の流域には古墳時代前期の遺跡がたくさんあります。新しい古墳時代の文化をもった人たちはこの江川をさかのぼり、定着して新しい村をつくっていったと考えられます。その中でも、住居の大きさや家の数、出土品などから推測すると、亀山北遺跡がそれらの村の拠点的、中核的村だったのではないのでしょうか。

(真岡市教育委員会 小筆 一成)



1号住居遺物出土状況



小型甕出土状況



管玉出土状況



調査区東部全体写真

学校教育・生涯学習関連貸出し資料一覧

(平成14年4月1日現在)

埋蔵文化財センターは、「**どき土器体験10**」で
学校教育・生涯学習をサポートします。

- 1【遺物貸出Kit】 各時代2セット
- a 縄文時代編〔縄文土器（深鉢）・石器（打製石斧・磨製石斧・石鏃）〕=2セット
 - b 古墳時代編〔土師器（甕・甑・坏・鉢）・須恵器（坏）〕=2セット
 - c 平安時代編〔土師器（甕・甑・坏）・須恵器（坏）〕=2セット

- 2【火起しセット】 各5セット
- a 舞錐式（古代以降に使用されたもの）=5セット
 - b 紐錐式（縄文時代に使用されたもの）=5セット

- 3【石器作りセット】 20セット
- a 鹿角ハンマー=1本
 - b 成形用鹿角=20本
 - c ゴーグル=20個
 - d 膝当て革（セーム皮）=1枚
- ※石材は御購入下さい（詳しくは御連絡下さい）。



- 4【簡易勾玉作りセット】 30セット
- a 平ヤスリ=30本
 - b 丸ヤスリ=30本
- ※石材は御購入下さい（詳しくは御連絡下さい）。

- 5【アンギン・セット】 11セット
- 簡易小型アンギン機（台はありません）=11セット

- 6【縄文研究補助教材】
- a 鹿角（鹿角を切っただけのもの）=1対
 - b 鹿皮（冬毛）=1頭分

- 7【体験学習復元土器】 縄文料理体験用
- a 縄文土器深鉢（ナベ・左の写真）=2個
 - b 縄文土器浅鉢（捏ね鉢）=1個
 - c 土師器甕（ナベ）=1個

- 8【土器パズル 3セット】
- 復元した土器を割り、立体パズルにしました。

- 9【原始・古代復元衣装】
- a 縄文時代男性用一式（右の写真）=3組
 - b 縄文時代女性用一式=1組
 - c 古墳時代首長層男性用一式=1組
 - d 古墳時代巫女用一式=1組
 - e 古墳時代男性用一式=1組
 - f 奈良・平安時代役人常装一式=5組

- 10【講師】
- 各時代の専門家を、沢山取り揃えております。

貸出の希望は、普及事業担当まで御連絡下さい。
なお、申請書類例は、<http://www.maibun.or.jp/japanese/info/form.html>で御覧になれます。
歴史や地域史についてのご相談も受けまますので、お気軽にご連絡下さい。



栃木県埋蔵文化財
センター
栃木県立博物館
共催

平成13年度 発掘調査 報告会

当埋蔵文化財センターでは調査発掘した中からいくつかの遺跡について、年度ごとに報告会をおこなっています。平成13年度は、下記の6遺跡に決定致しました。調査担当者による一般向けの解説です。スライド等を使い、なるべくわかりやすく報告したいと思います。

日時：平成14年6月9日(日)

午前10時～午後3時

場所：栃木県立博物館 講堂

定員：200名

入場：無料

申込：県立博物館普及資料課(028-634-1312)まで
電話にてご連絡ください。

発表遺跡：1. 野沢遺跡(宇都宮市)

2. 峰高前遺跡(二宮町)

3. 磯岡北古墳群(宇都宮市)

4. 長者ヶ平遺跡(南那須町)

5. 彦七新田遺跡(市貝町)

6. 下陰遺跡(真岡市)



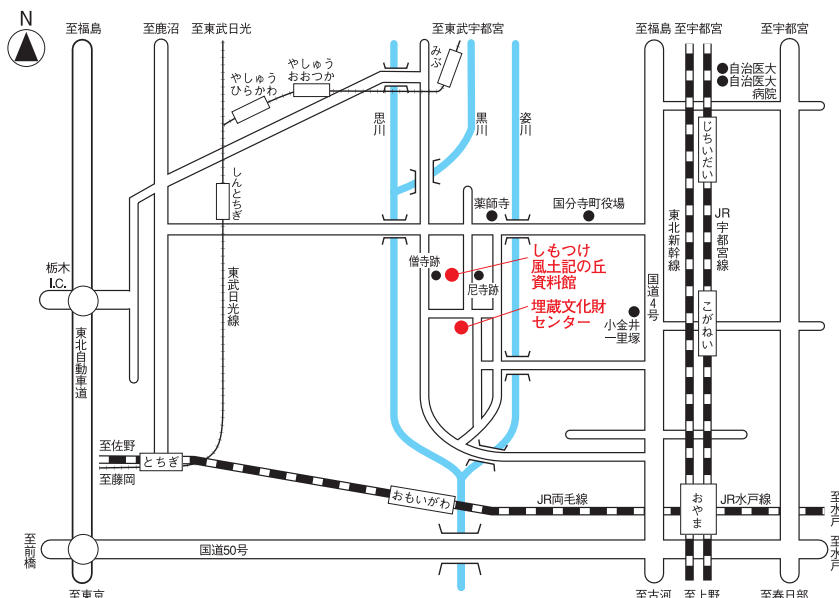
編集 後記

例年に無い早い桜の開花とともに早春がおとずれました。前号で野沢遺跡現地説明会のご案内を致しました。その後3遺跡で説明会が行われましたが参考にしていただけたことと思います。今回の『やまかいどう』には新聞で取り上げられた遺跡の発掘調査も掲載されています。これからも現地説明会・発掘調査報告会等への参加を心よりお待ちしております。

《埋蔵文化財センターへのご案内》

- JR小金井駅から約4km、車で約10分
- 東武壬生駅から約6km、車で約15分
- 東武栃木駅から約9km、車で約20分

編集 (財)とちぎ生涯学習文化財団
埋蔵文化財センター
発行 栃木県埋蔵文化財センター
〒329-0416
栃木県下都賀郡国分寺町大字国分乙474
TEL 0285-44-8441(代) FAX 0285-44-8445
E-mail webmaster@maibun.or.jp
URL <http://www.maibun.or.jp/>
印刷 ヤマゼン コミュニケーションズ(株)



しもつけ風土記の丘資料館・
栃木県立博物館・
なす風土記の丘資料館

平成14年度 栃木の遺跡

—最近の発掘調査の成果から—

紀元前 10000	旧石器時代	☆主な展示予定資料 展示室のスペースや遺物の整理日程の都合により、各館の展示資料が変更になることがあります。(◎は3館共通展示)
	紀元前 400	縄文時代
紀元後 300		弥生時代
	600 700	古墳時代
(飛鳥)		
奈良・平安時代		◎上神主・茂原遺跡(宇都宮市・上三川町) ◎長者ヶ平遺跡(南那須町) ◎彦七新田遺跡(市貝町) ・東薬師堂7号遺跡(国分寺町)
		鎌倉・室町時代
1200		
1600		

栃木県では、毎年多くの遺跡で発掘調査が実施されています。平成13年度を中心とした埋蔵文化財の発掘調査によって得られたさまざまな資料を、より多くの方々に理解していただくために、県南・県央・県北の3館で巡回して展示いたします。ぜひお誘い合わせの上ご来場いただき、文化財を身近に感じ、郷土の祖先の暮らしを振り返ってみてください。

平成14年4月13日(土)～5月19日(日) しもつけ風土記の丘資料館

下都賀郡国分寺町国分993(Tel 0285-44-5049)

栃木県埋蔵文化財センター

●平成13年度発掘調査報告会

日時：6月9日(日)10:00～15:00

会場：栃木県立博物館 講堂(詳細→33ページ)

平成14年7月13日(土)～9月1日(日) 栃木県立博物館

宇都宮市睦町2-2(Tel 028-634-1311(代))

●テーマ展展示解説

7月13日(土)10:00～15:00

平成14年9月27日(金)～11月4日(月) なす風土記の丘資料館

展示会場：湯津上館

那須郡湯津上村湯津上192(Tel 0287-98-3322)

●第10回企画展記念講演会

日時：10月13日(日)13:00

講演会場：小川町ふるさと館

那須郡小川町小川3789(Tel 0287-96-3366)

演題：『最近の成果—栃木県内の発掘調査から』

講師：大金 宣亮(埋蔵文化財センター調査部長)

3館共通 利用の案内

開館時間：9:30～17:00

(入館は16:30まで)

休館日：月曜日(祝日・休日を除く)

祝日・振替休日の翌日

観覧料：博物館 一般250(200)円

大学・高校生120(100)円

資料館 一般100(80)円

大学・高校生50(40)円

※()内は2歳以上の団体料金

※中学生以下は無料